

巻	頭
特	集

セカンドステージからの挑戦



大学を卒業して、10年・20年・30年以上も経つと、色々な人生の節目に出会います。人生のセカンドステージは、それぞれの人によって時期も形態も違うことでしょう。さまざまな切り口から、KGと関わりながらセカンドステージを生き生きと活動している達人のエッセンスを集め、皆様への応援歌にしたいと思います。この企画を通じて少しでもKGへの回帰とともに、卒業生にとってKGがセカンドステージ大学と位置付けられる存在となりあるいは人生のベースキャンプとなればと願っております。

村尾教授と八塩准教授には、貴重な時間を割いていただきインタビュー致しました。他の方々にはアンケート形式でお願いしました。

【八塩圭子氏の略歴】

- 1969年 東京都生まれ
 - 1993年 上智大学法学部卒業
テレビ東京入社、報道局経済部で記者を務める
 - 1994年 同局アナウンス室に異動
「出沒！アド街ック天国」などで人気を博す
 - 2002年 法政ビジネススクールでマーケティングを専攻
(2004年MBA取得)
 - 2003年 結婚を機にテレビ東京を退職しフリーアナウンサーとして活動を開始
 - 2006年 関西学院大学商学部助教授(現准教授)
- レギュラー
「めざましどようび」メインキャスター(フジテレビ)
「ベンチャー必勝の法則」メイン司会(BSジャパン)
「JAM THE WORLD」DJ(J-WAVE)ほかで活躍中

【村尾信尚氏の略歴】

- 1955年 岐阜県高山市生まれ
- 1978年 一橋大学経済学部卒業
大蔵省(現財務省)入省 関税局企画課
- 1995年 三重県総務部長
- 2001年 財務省理財局国債課長
- 2002年 環境省総合環境政策局総務課長
- 2003年 関西学院大学教授
東京新聞でのコラム連載、テレビ番組などでのコメンテーターとして活躍
- 2006年 NEWS ZERO(日本テレビ系列)メインキャスター(上記以外)
- 2001年 納税者のための行革推進ネットワーク WHY NOT設立
独立行政法人経済産業研究所コンサルティングフェロー(~02)
- 2003年 「もうひとつの日本を考える会」座長(~05)

公務員から大学教授へ 「NEWS ZERO」キャスターに

【村尾信尚教授】

■ 県民の声が転機に ■

昭和五三年に大蔵省に入って、そこまではまさか自分が官僚から転身するなんて夢にも思っていなかったのですが、今から十年くらい前、大蔵省から三重県の総務部長に転向したときに、カラ出張事件というスキャンダルがありました。実際に出張に行っていないのに出張に行ったことにして、裏金を一杯作っていたという事件です。役所の論理・身内の論理・公務員の論理でやっていたことが問題になり、県民の皆様から県税不払い運動を起こされたり、抗議の手紙、お叱りの電話、脅迫状などをいただいたとき、これからは県民の論理・外部の論理・民間の論理に切り替えないと、企業が消費者からそっぽを向かれたらつぶれるように、役所も納税者や市民からそっぽを向かれたら、もうつぶれるなどと思ったのが不惑の年を過ぎた四〇歳ちよつとときです。

■ 市民の無気力・無感動に挑戦 ■

その後、三重県で行革をやらせてもらい、大蔵省に戻ってみるとピフォアー・アフターのごとく、雰囲気は違っていました。もう永田町の政治家と霞ヶ関の役人だけに任しておくのは無理で、日本はまさにタイタニック号だと思えました。その沈もうとしているタイタニック号の中で、政治家と役人はひたすら一等船室を目指しているときに、国民がしっかりしなければいかんとの思いから、NPOを立ち上げました。しかし、近所の人に呼びかけると「何言ってるの。そんなドン・キホーテみたいなこと言っても世の中変わらないんだから」と言われて、これから闘わなくてはいけない敵は、守旧派の側の人達ではなく、善意の人達

の無気力・無関心だと、そのとき気づきました。

三年間の三重県への縁から、北川知事後の知事選に、出馬の要請があり、自民党・民主党からの支援を断って市民派として立候補して大差で落選し、浪人へ転身しました。半年の充電期間ののち、大蔵省の同期生で関学の宮原副学長（当時）の紹介で東京オフィスの教授に迎えられるのが二〇〇三年十月です。品格のある大学だというイメージが強く喜んで引き受けました。

■ ライバルはバラエティ番組 ■

そうした中であっても、世の中を変えていかなければならないという思いがあり主張しているうちに、日本テレビから五二年続いた「きょうの出来事」というニュース番組をやめるにあたり、若い人のニュース離れを食い止めるため若い人に見てもらえるニュースを作りたい、メインキャスターを引き受けてくれないかという話がありました。テレビ局もニュースを通じて自分たちも日本を変えたいという思いを持っており、話を承諾しました。

関学のゼミの学生たちですが、いい素質を持っており、ちよつとどこかを刺激してやるとどんどん伸びてきます。そうするとニュースを見るようにもなり、世の中のことを考えることもできるようになります。「NEWS ZERO」のライバルは、同時時間帯のニュース番組ではなく、その時間帯にバラエティを見ている人だとかこれまでニュースを見ていない人を引き込みたいんです。若い人に社会の見方とか切り口を教えてあげたい。

■ 人間万事塞翁が馬 ■

自分が社会を変えなければいけないという思いがあり、



教授だとかキャスターだとか政治家だとかあまりポストにこだわらなつてもいいと思います。若い人達に問題意識を持ってもらって社会を変えていきたい。現在、関学の教授としてあるいは「ZERO」を通して若い人達に発信もできるので、満足だしハッピーです。次のステージやステップは全然考えていません。「人間万事塞翁が馬」で、ピンチがチャンスになったり、幸福だと思っていると不吉な予感だったり、明日のことを図ったってわからないからこそ、今の信念を貫いていこうと思っています。

同窓生は社会奉仕を

団塊世代の皆さんもそろそろ悠々自適の人生を送ってくださいと言いたいのはやまやまですが、もう日本が許してくれません。高度成長を実現してくれた世代に、もう一度がんばって欲しいと思います。企業だとかで頑張ったエネルギーを、地域社会やボランティアや福祉のために使って欲しいと思います。特に関学を卒業した皆さんがたは、若いときにキリスト教を通じて、他人のために、社会のために奉仕するという慈愛の精神を身につけています。その中核になるのが、学院であり同窓会であつたらいいと思います。例えば登下校の幼い子供達を犯罪や災害から守るボラ

ンティアとかいろいろなことができるでしょう。同窓会をコアとして、社会に還元していく一つのツールづくりができないでしょうか。

ボーダーなき関学卒業生

時代は既にボーダレスの時代に突入しています。官と民、大学間、世代間、地域と大学等のボーダーを取り払えば新しいものが見えてくるでしょう。頭の中で勝手に引張っているボーダーを全部取り除いて、何でもあり、何でも交遊あり、学院と同窓会、同窓生と現役学生、あるいは自分のような外様のものも入れてもらうというようなボーダレス関学、門戸開放関学となつてもよいと思います。

関学は英語でDecent (上品な)

関学は、何か品があるというか、英語でDecent、上品なとかマナーがよい、非常にエチケットを心得ている人が多い。食事をしたり話をしたりして、一番気楽で気を許せるのは同窓生で、利害や打算抜きにして交われる。いい経験をされてきた方々と、忌憚なく天下国家論を含めていろいろな話ができるのは、本当に気が休まるし、そこでまた活力をもらえます。そういう場が皆さんの中にたくさん起こり、何かいろいろ有意義な議論が行われればいいなとも思っています。

記者からアナウンサーへ、MBA取得、関学の准教授に

八塩 圭子准教授

船がやってくる…船が来たら必ず乗っている

自分がこういう風にやろうと思っっているわけではないです。いろいろな出会いときっかけ、私は「船がやってくる」

とよく言っていますが、向こうから船がやってきてそれに乗ると感じます。最初はずっとマスコミに行きたいと思っただけで、記者志望でテレビ東京に入り一年間記者をやっていました。アナウンス室の上司から誘われて異動し

ました。アナウンサー試験を受けていないため、最初は抵抗がありました。抗がありました。やっていたうちにその難しさがわかり、逆に攻略しがいがあると思いい直し、しばらくするとだんだん楽しくなってきた。異動を良かったと思えるようになりました。

大学院 (MBA) に関しても、番組のゲストで来られた法政大学の田中洋教授に「八塩さんみたいな人はぜひうちの大学で勉強して欲しい」と勧められて、夜間の大学院に入学しました。会社を辞めないで勉強したいと思ってたことだったのでその船に乗りました。偶然のようですがすべて繋がっている必然だという気がします。大学院で勉強している最中に、結婚して会社を辞めフリーになりました。修士論文が「テレビの視聴行動」に関するもので、学会発表したところ、その内容を聞いてくださった関学の新倉貴士教授から声を掛けていただき関学に来るということになったのです。すべてご縁です。

特にすごいビジョンを持っていてくれるわけではありません。これまで船が来たら必ず乗っています。いろんなところに船は行くと思いますが、多くの人は、ちょっと嫌だから、難しいから、忙しいからとてもじゃないけどできないというって、その船を「さようなら」と見送るわけです。船は通り過ぎていつて二度と戻ってきません。チャンスがあれば必ず掴む。当然乗る前には悩みますが、テレビ局の仕事に限界を感じ始めていたこともあって、新しいことを何かやりたい転機の時期だったことも幸いしました。

■ ネットワークが財産

仕事をしながら、自らのお金と時間を投じて、それで自分がやりたいからやるわけで、いつでも逃げられるから逆に逃げられません。やらざるをえない状況にしないと、人間やらないんですよ。睡眠時間を削っての修士論文執筆は孤独な自分との戦いで、テーマ選定・データ収集・統計的分析を加えて執筆していく、まさに谷あり山ありの世界です。

しかし、勉強は自分のためにもやるものですよ。大変なことも納得感があります。大変だけど、すごく楽しい。また、同期の仲間が互いに励ましあい、そのネットワークがすごい財産にもなっています。

■ 尊敬するのは頑張っている人

特になのですが、小さいときの母親の教育ですね。母親は姉と私共に、多くの習い事をさせました。ピアノ、習字、水泳、教会の日曜学校にも行く忙しい小学生でした。塾のような勉強でなく、趣味を広めるという方針だったのでしよう。お陰で忙しくていろいろなことをやっているのが好きという土台が身に付きました。それと何事に関しても要領が悪く、こつこつとやっていると、できるようになる楽しさを味わい、持続していくと周りがどんどんやめていくので、最後まで残ったものが勝ちだという経験則を掴みました。

(何でも好きなのを貪欲に吸収するというスタンスで、「欲と二人連れ」を座右の銘としておられる。エネルギーの一端を垣間見させていただいた。「やろうと思えばできる」、「目標ありきではなく、過程を楽しむ」、「結果重視よりも過程重視」などいろいろな言葉を発信された。)

■ もう少し自分のペースで

忙しいのは好きですが、忙しすぎるのはよくありません。もっとゆとりを持って生活するつもりでしたが、日々の目の先の仕事に忙殺されると、大学の研究やアナウンサーの仕事がおろそかになる恐れがあります。もう少し自分のペースを取り戻さなければいけません。



大学も変革を

大学も変革しなければならぬ節目の時期を迎えていますが、関学に招かれた理由のひとつは、外部から見た視点を生かし、新しい風を入れて欲しいということでした。

(しかし、正直変わろうとしていないという風に先生の目には映るし、外部の同窓の目からも見ても大勢は変わろうとしていないように映る。変わろうとしてくださいというのが両者の一致した気持ちです。)

学部を増やすとか初等部を増やすとか、関西の大学の多くは拡大路線に走っています。しかしどちらに行こうかと迷っているようにも見えます。私の母校上智大学は、ずっとスモールビューティーで行っています。学部も増やさない、学生も増やさない、でも、ブランドはしっかり維持していく。関学もどっちに行くのかはつきりさせて、関学ブランドが何なのか、今一度、学内・学外・卒業生も含めて議論し、マネジメントやマーケティングしていく必要があるのではないのでしょうか。

「かつし品質の高い教育」とか

「Mastery for Service」を「たけなつとつとが

特にオリックス会長の宮内義彦さんとか財界の卒業生は、相当危機感をお持ちのようです。変わらない伝統のよさと新しいよさを融合させることができれば、どこにも負けな母校愛を持っている関学の強みを発揮できます。それと社会人大学院等は、夜間開講で、コースも豊富で、アクセスしやすい場所にあることが重要です。

でも大学は大学で、社会人予備校や就職予備校になる必要はないと思います。

また、同窓という結びつきは心の中の結びつきで、統制したりするものではありません。

学院はビジョンを明確に

将来こうなりますよとかあるいはこう変えますよというようなメッセージがあったとすれば、賛同し寄付を申し出る人も増えるでしょう。母校愛も強く、好きだという人も多く、求心力があるのに、何故もつと利用しないのかと思います。

同窓の方々からのメッセージ

セカンドステージを自分流に成功させるための秘訣は

(日野原) 目標の人物に出会うこと。

(南井) 周りの理解を得ながら信念を持って日々前進するように心掛け、実行すること。

(窪寺) その日一日を生かして生きること。

(西) 冒険心。この人生一回という自覚。今好きなことをしないと一生しない。

(野田) ファーストステージで打ち込んだことをきちっと振り返ること。

(冷泉) ひとつのこと、何事でも良いが頑固に継承させること。

(松本) めげず、ひるまず。

(小西) 実態を良く見て、現実との適切な距離感をとることでしょうかね。

ご自身のセカンドステージは、いつ頃で、何をどのように実行されましたか

(日野原) 六〇歳からは医師のほか後輩の教育刷新と一般人のために健康教育の普及。八〇歳からは研究継続、九〇歳からは老人と子供の教育・平和活動に専念。

(南井) 五六歳、石油会社の役員で、日本アラブ協会の事務局を任されたとき、日本とアラブの掛け橋として尽力しようと決意した。また、個人的には六二歳のとき、定年後の生活設計のためヒマラヤを再訪したとき。

(窪寺) 定年退職や転職のたびに、人生の節目を感じた。セカンドステージといえるかもしれない。

(西) 昭和三九年卒業後、シアトルのワシントン大学大学院へ留学したときがセカンドステージの始まりだった。そこで修士号と博士号を取得、それから三〇年アメリカ在住で、現在麗澤大学と日本大学、スタンフォード大学フーヴァー研究所教授を兼任し、一〇〇歳までセカンドステージを続けるつもり。

(野田) 四〇歳、クリニックを通して個人を見るだけでなく、社会的問題の追求から人を考える研究に移しました。

メッセージを頂いた方々



西 鋭夫氏 (S39大文)
スタンフォード大学教授



窪寺 俊之氏 (特別会員)
関西学院大学神学部教授



南井 英弘氏 (S33大経)
日本アラブ協会相談役



日野原 重明氏 (S4旧中)
聖路加国際病院理事長



小西 砂千夫氏 (S58大経)
関西学院大学社会学部教授



松本 克巳氏 (S52大理)
日本ファイルハーモニー
第一バイオリン奏者



冷泉 為人氏 (S43大文)
冷泉家二五代当主



野田 正彰氏
関西学院大学教授

(冷泉) 学生時代の三〇歳頃までの修学期、大手前女子大に勤務の二〇年間、その後一〇年余、京都の和歌の家として俊哉、定家さん以来八〇〇年間続く冷泉家に婿養子として入った四〇歳の時。

(松本) 二五歳のとき、生物教師からヴァイオリン演奏家へ。

(小西) 四〇歳になった頃から、組織とは何かを考えるようになった。

ファースト／セカンドステージ
それぞれ誰の影響を一番受けましたか

(日野原) ウィリアムアスラー教授とシュバイツァー博士。

(南井) アラブ諸国の本質を理解して日本人に伝えようとしている方達、ヒマラヤ登山を重ねている先輩達。

(窪寺) 人生の教師と仰いだ先輩、恩師の生き様が大きく影響を与えてくれた。

(西) 戦後日本が高度成長期に入った時に、学生生活を送れたことは、自分自身の可能性に夢とロマンを持つことができた。フェンシング部で厳しい訓練を受け、全国制覇を成し遂げた達成感も卒業後の歩みに力強い励みにな

順不同

った。

(野田) 精神科医になるファーストステージでは、K・Jaspers、セカンドステージでは多くの社会学者。

(冷泉) 誰の影響もなく、自分自身がすべて決定した。

(松本) ファーストステージは関西学院の高山教授、セカンドではヴァイオリンの恩師。

(小西) ファーストステージでは、恩師、セカンドステージでは、一緒に仕事をした諸先生。

現在の状況はどうですか

(日野原) 現在九六歳、睡眠五時間で、世界を駆け巡り、あらゆる世代に生き方を指導している。

(南井) 今年五〇周年を迎えるアラブ協会は、季刊誌アラブの発行の継続、月例アラブ情勢研究会の開催、在アラブ諸国大使達との情報交換、アラブ要人、アラブ諸国との交流など広範囲にわたる相互理解促進を重ねています。また、二〇〇七年のチョー・オユー(八二〇一m)遠征で一年連続ヒマラヤの高峰に出かけています。一年中ヒマラヤ遠征のためのトレーニングを組み込み健康維持しています。二〇〇四年シシャパンマ中央峰(八〇〇八m)登頂は世界最高令登頂者記録(六九歳と七日)は現在も健在です。

(窪寺) 現在の教師は、先輩教師達、牧師達、学生達、身近にいる人達で、すべて私の人生に影響を与えています。

(西) 東京とカリフォルニアを毎年渡り鳥のように往復するため、健康が一番と考えています。結婚が遅かったため、子供がまだ小学生で、死なないで働きまくれの楽しい毎日です。

(野田) 老いて二つのステージともサイクルが終盤にきたようです。

(冷泉) 大変多忙で、雑事など様々な社会からの要請に応えるのに日々追われている。社会に還元、奉仕する年齢になったのは仕方のないことだ。

(松本) 日本フィルハーモニー交響楽団のファーストヴァイオリン奏者で、念願のセカンドアルバムが今年一月に完成、八月二十八日には東京文化会館で第五回リサイタル予定。

(小西) 地方財政を勉強していますが、自治体や国を組織としてみる事が多くなっています。

自身の今後の夢と目標

(日野原) 日本に新老人の会を世界に拡大し、子供に平和を教える運動を推進すること。

(南井) アラブ諸国との掛け橋役とヒマラヤ詣で。そして、地域防災活動を継続していく。

(窪寺) 自然・読書・運動など自由な時間を楽しみたい。

(西) 英語で小説を書き、アメリカで出版し、それをハリウッドへ売りたい。

(野田) 静かに暮らすこと。

(冷泉) 日本の文化、伝統文化の継承保存に努力する。

(松本) 更なる精進をして、以音伝心。

(小西) 良い本を書くこと。

学院との係り合いで良かったことあるいは不満なことは何ですか

(日野原) Mastery for serviceという他への貢献を期待。

(南井) 同窓活動を通じて、卒業生の人柄の良さは嬉しかったが、打たれ強い心配です。

(窪寺) 自由でハイカラな雰囲気は大変気に入っています。ただし、少し自己満足的傾向があるように思います。

(西) 関学の顔が見えない。日本で有名でない。アメフトが勝ったときだけ、一日ニュースになり、その後また何も見えない。

(野田) 上品な雰囲気は気に入っています。

(松本) 私との係わりで、生のクラシック演奏会に足を運んで頂ける方の輪が広がったこと。

学院がOB・OGに質の高い教養教育や 多方面の学びの場を提供できますか

(日野原) 実践を通して指導する他の団体と融合して行うことが効果的。

(南井) シニア達へは基礎講座と並行して、講師には会社運営の経験者や実務の真っ最中にある方を選び、彼等の長い社会生活の中で培ったノウハウや経験を実学として幅広く提供していけば多くの方が興味を示し、講義、ゼミ、研究会などに喜んで参加することでしょう。

(窪寺) 大学が持つ知的資源は非常に高く深く、大きいと思います。もっともっと地域に大学は開かれるべきだと思います。

(西) 大学校舎は長い春休みと夏休みの間、閑散としています。これらの期間を卒業生や一般の人達のための無料講座を開くと関学の広報にもなります。

(野田) 可能ですが、まず大学間で討論がないと。

(冷泉) 実利だけの世の中で、リベラルアーツ(教養)はきわめて大事です。数値だけが強調されているが、社会のトップに立つ人こそ教養が求められる。

(松本) 多種多様な情報源として提供できると考えます。

(小西) 例えば自治体の問題を大学で取り上げる場合、理論的に正しいことは当然ですが、実態を予断なく良く見て、組織論の観点がないと役に立たないと思います。

学院が卒業生にとって魅力あるためには

(日野原) 目標となる先輩を探すこと。

(南井) スポーツや色々な分野でマスコミでの母校に関する情報を増やすこと。実力のある卒業生を理事会に入れること。各学部の教授会は理事会の傘下に。

(窪寺) 世界に通用する研究や活動が行われること。

(西) スポーツ入学、スポーツ奨学金を徹底する。入試だけでなく入学方法の採用を。純血主義を止め、有名な教

授を雇え。教授の質が大学の質である。スポーツは大学の広告塔である。

(野田) 大学がもっとどんな研究をしているか対外広報が必要。

(冷泉) 理念がしっかりしていること。マスターリーフオーサービス、無償の奉仕。

(松本) いつも門戸を開けておくことでしょう。

(小西) 基本に戻って教育を充実させることでしょう。

卒業生へのメッセージを一言 お聞かせください

(日野原) 卒業後が学びの本番であると認識すること。

(南井) 自分に正直に生きること。英会話は必須、外国紙、誌やインターネット情報に目を通し、情報を先取りする。知識を集積し、トップに立った時智恵を絞ってその集積を活用して欲しい。

(窪寺) Mastery for serviceを実践できる人間となること。

(西) 夢を追え、今持っているロマンを忘れるな。忘れなためにロマンを追え、行動しろ。

(松本) 素直な気持ちを封じ込めすぎないで。

(小西) 四月スタートの人間福祉学部にぜひご注目ください。

